

# 科学的經濟理論の創造的發展について (三)

なんじら、目ありて見ぬか、耳ありて聴かぬか。

またなんじら思い出でぬか。

(マルコ伝、第八章十八節)

山本 二三九

まえおき

- 一 「労働者人口法則」について (以上、第十二卷第四号所載)
- 二 「価値と価格」の問題 (以上、本号所載)
- 三 「労働の生産性」の問題
- 四 「再生産表式」について
- 五 「利潤率の傾向的低下の法則」について
- 六 「恐慌理論」の問題
- 七 「絶対的貧困化」の問題
- 八 「社会変革」の問題
- 九 科学的經濟理論の創造的發展について  
むすび

科学的經濟理論の創造的發展について (二)

## 二 「価値と価格」の問題

(一)

わが堀江氏による「マルクス経済学の創造的發展」なるものの真の内容を正しくとらえるためにわれわれが究明すべき「当面必要にしてかつ十分な問題点」として、さきにわれわれは八項目にわたる理論的問題点を挙げ、まずその第一の問題点―「労働者人口法則」の問題―についての氏の主張を簡単に吟味したのであるが、この第一の問題点についての究明は、氏による積極的な理論的理解のほどよりも、むしろ、氏によるマルクス中傷のほどを如実に示す結果をもたらしたものである。そこで、われわれは、可能なかぎり、本筋にかえるべくこころみることにし、まず最基本的問題たる「価値と価格」の問題について、氏による積極的な理論的理解のほどを省察することにとめなければならぬ。おそらく、この問題についての氏の理解のほどが、氏による「創造的發展」の成果を正確に示す第一の試金石となるであろう。

「価値と価格」の問題について、堀江氏がいかにマルクス経済学の真髄をふかくとらえているかということが比較的にもっともよく示されているものとしては、さしあたり、氏の大著の最後におかれた「第二十四章」が挙げられるであろう。この章は、「同一労働時間は同一価値量を生むか？」という、まことに注目すべき表題をいただいているのであるが、その最初の節―「I 労働価値説の出発点における混乱」―において、氏は、マルクス労働価値説の「混乱」なるものを、「価値と価格」の問題について『論証』しているのである。そこで、われわれは、まず、その「第

「一節」における氏の『論証』について考察しなければならない。

氏は、その「第一節」を、つぎのような説明をもってはじめる。

「マルクスは抽象的人間労働と価値と価格との関係について、『資本論』第一巻第一章で次のように書いている。

『およそ労働は、一方では、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、同等な人間的労働あるいは抽象的・人間的労働というこの属性においては、それは商品価値を形成する』。

しかし、価値（労働量）の大きさはそれ自体として直接に表現されるものではなく、価格によってのみとらえられる、『金によっての一商品の価値、表現—— $\times \text{商品} = \text{貨幣}$ ——は、その商品の貨幣形態、あるいはその商品の価格である』（傍点原文）。

『価格は、商品に対象化されている労働の貨幣呼称である』（傍点原文）（前出、三七八ページ）。

わが堀江氏は、「抽象的人間労働と価値と価格との関係」を考察するにあたって、右のように、まず『資本論』第一巻第一章および第三章の中から、右の三者についての説明が与えられている三箇の引用文をかかげて、これらを見「自明の論拠」にしようとしている。だが、これらの引用文そのものについてはもとより問題はないとしても、これらを除いた残りの部分、すなわちわが堀江氏自身の筆に成る箇処については、けっして問題がないとはいわれない。引用文を除いた残りの箇処といえ、つぎの一箇の文章だけしかない。——曰く、「しかし、価値（労働量）の大きさはそれ自体として直接に表現されるものではなく、価格によってのみとらえられる。」（傍点—山本）。このわずかに一箇の文章は、きわめて意味深長なものをもってしているのである。

右の文章について、傍点を附した箇処にとくと注意されたい。「価値（労働量）」という表現は、通常の日本語の用法においては、「価値」＝「労働量」ということを示すものであり、事実、わが堀江氏も、「価値」＝「労働量」の意味に

において、右の独特の用語を用いている。だが、「価値」と「労働量」とを同一視することは、マルクスの価値論から直接に逸脱することを意味する。さらに、価値が「価格によってのみとらえられる」という文章についても、氏がその内容を「価値」「価格」としてとらえていることは、まもなく掲載される氏の所論の中にくりかえし並べたてられている以下のごとき独特の諸表現によって裏書きされている。——曰く、「…価値量(価格)…」、「…価値量(価値表現としての価格)…」、「…価格(価値量)…」、「…価値?(価格)…」、「…価値量?(価格)…」、「…価値(価格)…」、「…価格(価値?)…」等々。

そこで、右のごとき「労働量」「価値」「価格」という、独自の「範式」を念頭におきつつ、氏による「問題提起」をつぎに見てみよう。さきに挙げた箇処にひきつづいて、氏はつぎのように述べる。

「そして『同じ労働は、生産力がどう変動しようと、同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生みだす』(傍点原文)のだから、ある一定の労働時間の量と、価値量および価格とのあいだの量的関係はつねに一定であるかのようにみえる。

すなわち、 $a \propto \frac{1}{b}$  (註) という関係は不変であるかのように考えられる。だがはたしてそうだろうか?」(前出、三七八ページ、ゴシック体—山本)。

さきに注意したように、「a労働時間||b価値量」という言葉が、きわめて重要な勘どころである。この言葉の内容を適当にひねくり廻すことによつて、マルクスの右の基本的命題——「同じ労働は、生産力がどう変動しようと、同じ時間内につねに同じ大きさの価値を生みだす。」——の完全な誤りを『論証』しようというのが、以下に展開される堀江氏の論述の一つの目的である。そこで、煩雑をいとわず、氏の得意とされる「仮説的な例示」をそのままはじめにかかげ、ついで、これを中心とする氏の主張の全文をあまさず掲載することにしよう。(各パラグラフの頭に附

表式 I a 労働時間(価値量) = b 価格(価値量)  
 という関係は不変であるか?

- (1) いま1オンスの金には1時間の労働量がふくまれていると仮定すれば、

20エルレの亜麻布 =	.....→	2時間 = 2ポンド
1枚の上衣 =		a時間 = b価格
10ポンドの茶 =		(同価値 = 同価値)
40ポンドのコーヒー =		
1クォーターの小麦 =		2オンスの金 = 2ポンド
1/2トンの鉄 =		(2時間)
X 商品 A =		
計 14ポンド (14時間)	.....→	14時間 = 14ポンド
		a時間 = b価格
		(同価値 = 同価値)

- (2) 生産性向上の結果、各商品にふくまれている労働時間が半減すれば

20エルレの亜麻布 =	.....→	1時間 = 2ポンド
1枚の上衣 =		1/2 a時間 = b価格
10ポンドの茶 =		(同価値 < 同価値)
40ポンドのコーヒー =		
1クォーターの小麦 =		2オンスの金 = 2ポンド
1/2トンの鉄 =		(1時間)
X 商品 A =		
計 14ポンド (7時間)	.....→	7時間 = 14ポンド
		1/2 a時間 = b価格
		(同価値 < 同価値)

- (3) 生産性向上の結果、同一労働時間で各商品が2倍できたとするば

40エルレの亜麻布 =	.....→	2時間 = 4ポンド
2枚の上衣 =		a時間 = 2b価格
20ポンドの茶 =		(同価値 < 同価値)
80ポンドのコーヒー =		
2クォーターの小麦 =		4オンスの金 = 4ポンド
1トンの鉄 =		(2時間)
2 X 商品 A =		
計 28ポンド (14時間)	.....→	14時間 = 28ポンド
		a時間 = 2b価格
		(同価値 < 同価値)

- (4) 金を生産する労働の生産性だけが2倍にあがったとするば

20エルレの亜麻布 =	.....→	2時間 = 4ポンド
1枚の上衣 =		a時間 = 2b価格
10ポンドの茶 =		(同価値 = 同価値)
40ポンドのコーヒー =		
1クォーターの小麦 =		4オンスの金 = 4ポンド
1/2トンの鉄 =		(2時間)
X 商品 A =		
計 28ポンド (14時間)	.....→	14時間 = 28ポンド
		a時間 = 2b価格
		(同価値 < 同価値)

した①、②……という番号は、のちの説明の便宜上、山本が附けたものである。  
 「マルクスは『資本論』の『どこにおいても、簡単化のために、金を貨幣商品だと前提』(傍点原文)しているから、私もここで、金を貨幣商品として、一つの仮説的な例示をおこなおう。

これは、おなじみの第一章第三節「D、貨幣形態」のところで、マルクスの示している例に、「一オンスの金が一時間の労働をふくんでいる」という仮定をつけ加えたものである。

①第一の場合には、個別商品については、 $\frac{2}{14}$ ポンド  $\frac{2}{14}$ ポンド、という関係が存在し、七つの商品の合計については、 $\frac{14}{14}$ ポンドである。

②ところが、生産性向上の結果、第二の場合のように、各商品にふくまれていた労働時間が半減すれば、二オンスの金にふくまれている労働時間も半減するので、第一の場合には二ポンドという貨幣単位で表現されていたのに、いまでは一時間が二ポンドで表現されることになる。したがって、各商品の個別的価格にも、各商品の価格の相互的な関係にもなんの変化も起らない。

③しかし、価値(労働量)が価格によってしか表現されないものとしたら、——そして、それはそうなのである——たとえば二十エルの亜麻布をとってみれば、それにふくまれている労働量(価値量)は、最初は、二時間であったのに、いまでは一時間に減少した。ところが、亜麻布の価値表現としての価格は二ポンドで変化がない。つまり、いまではより少ない労働量(価値量)が、同じ大きさの価値量(価値表現としての価格)で表現されることとなる。一商品だけでなく、七つの商品の合計をみても、もちろん事情は同じである。最初に十四時間の労働量(価値量)をふくんでいた総価格十四ポンドの商品は、いまでは七時間の労働量(価値量)しかふくんでいないのに、相変わらず十四ポンドという価値量(価値表現としての価格)で表現されている。

④次に、生産性向上の結果、同一労働時間で各商品が二倍できるようになったとすれば、こんどは、以前と同じ二時間の労働量(価値量)をふくんでいるのは、使用価値として以前の二倍の量をもつ四十エルの亜麻布であるが、その価格(価値量)は、以前の二倍の四ポンドとなる。七商品の合計についても同じことで、使用価値として二倍にふえた商品群は、以前と同じ十四時間という労働量(価値量)で生産されるのに、その価格(価値表現としての)は、二倍の二十八ポンドなのである。

⑤マルクスが「同じ労働は、生産力がどう変動しようと、同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生みだす」といったのは誤りである。そういうとマルクスは「金の価値変動は……価値尺度としての金の機能を妨げるものではない」(傍点原文)といったではないか、と抗議する読者があるかも知れない。「金の価値変動は……すべての商品に同時に影響し、したがって

他の事情が同一ならば、すべての商品の相互的な相対的諸価値を——それらはいまやすべて、以前にくらべてより高い、あるいはより低い・諸々の金価格で表現されるが——不変のまましておく」のだから、さしつかえなかるう、と。

⑥ マルクスの前提は「他の事情が同一ならば」だから、この場合には、金の生産性だけが変動して、他の諸商品の生産性は不変である。たとえば、さきに示した図解の(4)の場合なのである。こういうときには、金貨幣が、他の諸商品にふくまれてい  
る労働量(価値?)の相対的な比率を表現する機能はならぬと妨げられない。これはマルクスのいうとおりである。だが、二十  
エルレの亜麻布は、以前もいまも二時間という同一労働をふくんでいるのに、その価値?(価格)は二ポンドから四ポンドに  
あがっているのだ。七つの商品の合計についても、事情はもちろん同じである。

⑦ つまり、マルクスの例によって考えても、同じ労働時間が同じ価値を生み出す、という命題は通用しない。この命題は、  
結局、同じ労働時間は同じ労働時間(価値?)である、という同義反復より以上のものではない。同一労働時間が同一価値  
(価格)を生み出すというのは、金の生産性が不変なときだけ通用する話である。金の生産性に変化が起った場合には、同一  
労働時間(同一価値量?)の生産物はちがった大きさの価値量?(価格)によって表現されねばならないのである。

⑧ どうやら、マルクスのいう「価値と価格とのあいだの量的不一致」とは性質のちがう「量的不一致」が存在するようだ。  
この量的不一致をなくす方法は、理論的に二つ考えられる。一つは金の生産性を絶対に変化しない、と仮定することだ。だ  
が、これは現実を無視した考え方である。第二の方法は、金の生産性の変動に正比例して、同じ名前の貨幣単位にふくまれる  
金の分量を増減することだ。たとえば、金一オンスが一ポンドであったとすれば、金の生産性が二倍にあがったら二ポンドを  
一オンスとするのである。そうすれば、最初は一オンスの金が一時間で生産されていたが、いまでは二オンスの金が一時間で  
生産されるようになったというような場合なのだから、一時間はつねに一ポンドという「価値表現」を得る。

しかし、実際には、こんなに器用に「ポンド」の表示する金量を時々刻々にかえることはできないし、それができたとしたら、  
貨幣が貨幣の役を果さなくなる。マルクス自身が次のように書いているではないか。

「諸価格の度量基準たるためにはある一定分量の金が度量単位として固定されねばならぬ。……まったく同じ分量の金が度  
量単位として不変的に役立てば役立つほど、諸価格の度量基準はそれだけよくその機能を果たすことになる」。

⑨ したがって、ある貨幣単位にふくまれている金量が固定されている場合には、価格(価値?)と労働量(価値?)との関

係は同一不変にとどまらないのが原則である。私の図解のように、諸商品の生産性も金の生産性も等しくあがり、しかも生産価格の法則を考慮に入れていない抽象の段階では、同一価格は生産性の向上度に反比例してより少ない労働時間を表現するようになる。あるいは、より少ない労働時間で作られるようになる同一商品は相変らず同一価格で表現される。社会的総生産物についていえば、物価水準は不変であり、生産性の向上度に正比例して、その総価格はふえていく、総価値(総労働量)は総価格ではなく、同一の総労働量(総価値?)が、生産性の發展に正比例して、より大きい総価格(総価値?)で表現されるのである。

⑩次に、金貨幣から離れて、われわれが工業生産量指数などを作製する場合の、不変価格(ある年次の価格を基準として物価の変動を調整した価格)を考えてみよう。これは、物価水準を一定(といっても近似的なものだが)とすることだ。したがって、われわれは、ある年次にくらべて、他の年次に、工業製品の総価格がたとえ一割ふえていけば、工業生産量が一割(近似的な意味で)ふえたと推定するのである。

このさい、基準年次と問題の年次とのあいだで、生きた労働の総量もかわらず(同一数の労働者が同一時間働き)過去の労働の量もかわらない(基準年次に所有している機械・原料などにふくまれて一定量の労働時間が、そのまま「移転」されていく)という、いちばん簡単な仮説的狀態を考えれば、この場合にも、同一の総労働量がより多くの総価格で現われるということができよう。このさいには、基準年次にくらべて、総価格が一割あがったというのは、生産性が一割あがったことの尺度なのである。」(前出、三七九—三八三ページ、傍点および「堀江氏、ゴシック体—山本」)。

(1) 堀江氏の原文では  $\frac{P}{P_0} = \frac{Q}{Q_0}$  とあるが、山本が  $\frac{P}{P_0} = \frac{Q}{Q_0}$  と訂正。(表式のゴシック体—山本)  
なお、この「表式I」には、氏自身、つぎのような註記を加えているので、念のためつきにかかげておこう。

「2.  $\frac{P}{P_0} = \frac{Q}{Q_0}$  及び  $\frac{P}{P_0} = \frac{Q}{Q_0}$  価格 という一般的な形で補足したのは、二時間の二と、二ポンドの二とは内容的に等しいわけではないことを示すためである。この場合  $\frac{P}{P_0}$  と  $\frac{Q}{Q_0}$  となるのは、いわば偶然にすぎない。二時間と二ポンドとは、ある時点においてたまたま対応している二つの大きさであるだけで、直接に比較しうる大きさではない。なぜなら、// 抽象的・人間的労働時間 // と価格 (理念的平均価格) とは次元を異にするからである。したがって、これは一般的には  $a$  時間対  $b$  価格 という対応関係は不変であるか? という問題なのである。(傍点—山本)

みられるとおり、わが堀江氏は、四箇の「図解」をふくむ「表式」をかかげ、これにたいする説明として、①より⑨までにわたって、マルクスの主張——「同じ労働は、生産力がどう変動しようと、同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生みだす。」——が完全に誤りであることを『論証』しているのである。⑩においては、右の「論証」にもとづき、「労働価値説では社会的総生産物の増大を測定することができない」という、氏独自の主張をかかげているのであって、われわれとしては、まず、①より⑨にわたり氏の『論証』をたちいって吟味し、ついで、節をあらためて、⑩の所論を検討することにしよう。

堀江氏がその第二十四章第一節——「I 労働価値説の出発点における混乱」——の冒頭においてまず『資本論』第一巻第一章および第三章からの三箇の引用をかかげていることは、さきに見たとおりであるが、われわれも、われわれ自身の考察をはじめるにあたって、「出発点における混乱」の生ずる恐れのないように、右のおなじみの引用について、その内容をいささか確定しておくことが適切であると考えられる。まず、第一の引用について、「抽象的・人間的労働」が「商品価値を形成する」という場合、この言葉は、けっして労働Ⅱ価値であるということを意味するものではないことを指摘せねばならぬ。さきにみたように、堀江氏は、労働を価値と同一視して、きわめて特異な諸表現を統々用いているのであるが、これは、別の見方からすれば、価値と価値の実体を区別しえない幼稚な議論とすべきなのである。抽象的・人間的労働は商品価値を形成する、しかし、労働は価値ではない。価値は、労働が対象化したものであり、価値は商品の価値なのである。このことは、たとえば、同じ一労働時間が一個の生産物Ⅱ商品に対象化するか、あるいは同種の二個に対象化するかにしたがって、それぞれの場合の商品Ⅱ生産物の価値がまったく異なったものとなるという事情を考えただけでも明白である。

つぎに、第二の引用については、二つの点を確認しておかねばならない。第一には、商品の価値は、それ自体として、直接にも、絶対的にも表現されえない、それは、ただ相対的にのみ表現されうる、ということである。これは、いかにえれば、 $X_{\text{脚}} \text{の 等価 } A = 2 \text{ 磅}$  などというようにはけっして表現されえないし、またそのようにとらえられないということ、それは、たんに  $X_{\text{脚}} \text{の 等価 } A = Y_{\text{脚}} \text{の 等価 } B$  という関係においてのみ、すなわち、等価形態に立つ商品(=等価物)の一定量によってのみ、表現されるにすぎない、ということである。この商品価値が絶対的にはとらえられえないこと、それは、他の一商品との等置関係においてのみ、他の等価物の一定分量によって相対的にのみ示されうるということ、決定的に重要な事柄である。第二に、この価値表現に役立つ等価物が一般的等価物となり、さらに貨幣商品となった場合には、すべての商品の価値は、この貨幣商品の一定分量をもってのみ示されるということ、価格とは、この貨幣商品の一定分量にほかならない、ということである。たとえば、 $X_{\text{脚}} \text{の 等価 } A = 1 \text{ キロワットの 金}$  としてあらわされ、1オンスの金が商品Aの価格なのである。

では、第三の引用において「商品に対象化されている労働の貨幣称呼である」というのは、どういうことであろうか？マルクス価値論についての初歩的知識もなく、『資本論』第一巻第一章および第三章に眼を通したことのない者は、この言葉をもって、ただちに 価格=労働、1労働時間=2ポンド、ということを意味するものと受取りがちである。なぜならば、2ポンドというのは、まぎれもない「貨幣称呼」であるからである。この種の人々には、1労働時間=2ポンドということは、ちょうど電力料金について1キロワット時=8円というのとまったく同じ意味をあらわすものと思われるのである。だが、この両者を同一視するような考え方は、甚しい誤りといわねばならぬ。さきの二つの引用について見たように、ここに述べられている「労働」は、「商品に対象化されている労働」であり、価値である。そ

の価値を貨幣商品の一定分量によって表現したものである。これが、その商品の価格である。この金の一定分量は、金の度量標準の諸々の貨幣称呼で表現される。そこで、たとえば、X量のA商品の価値を表現するのに、それは1オンスの金に等しいというかわりに、それは2ポンドに等しいというように、貨幣称呼(Geldname)で示される。これが、第三の引用の内容である。それゆえ、たとえば、 $X \text{ 圓のA 製品} = 2 \text{ ヌクマ}$  というように、A商品の価格が貨幣称呼(Geldname)で示されている場合には、このことは、内容的にみれば、たんに、 $X \text{ 圓のA 製品} = 1 \text{ ナクムの金}$  ということであり、要するに、X量のA商品の価値を一オンスの金によって相対的に表現しただけのものである。この第三の引用について「 $1 \text{ 埃魯製品} = 2 \text{ ヌクマ}$ 」ということしか読みとれない単純粗雑な頭脳にとっては、同じくマルクスの文章——「同じ労働は、生産力がどう変動しようと、同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生み出す」——についても、「同じ労働の同じ時間」は、「1労働時間」に、「同じ大きさの価値」は、「一定の価格」に——というの、価値を表現しただけのものが価格であり、価値と価格とは、とらえ方こそ異なれ、当の本体には変りがないから！——を移行(Ubergelen)として、おのづから「1労働時間一定価値一定価格、たとえばつねに2ポンド」という、「論理的帰結」が招来されることになりがちなのである。すなわち、さきの「電力料金式計算」に囚われた頭脳——独占的電力会社こそ、呪われてあれ！——にとつては、「同じ労働は……同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生み出す」というマルクスの自明の命題は、「労働時間、価値量および価格のあいだの量的な相互関係はつねに一定である」、すなわち、「 $a \text{ 労働時間} = b \text{ 価値量} = c \text{ 価格}$  (たとえば $2 \text{ ヌクマ}$ )」という関係は不変である」ことを述べているものとしてのみ、その眼に映ずるのである。このような「電力料金」式頭脳の現存を念頭においてわれわれは、以下、①より具体的検討に移ることにしよう。

堀江氏は、はじめに「一オンスの金が一時間の労働をふくんでいる」という「仮定」を設けているが、われわれはさらにその上に、氏のかかげる「表式I」の(1)によって、氏が1オンスの金に1ポンドという貨幣称号を与えていることを知ることができる。すなわち、1オンスの金(≡貨幣商品)の中には1労働時間が対象化しており、金1オンスの価値は1労働時間であること、1オンスの金は、その重量称号とは別に1ポンドという貨幣称号を与えられていること、——これが前提とされているのである。この前提について、なお念のため附け加えておけば、金の価値も他の商品と同様に變動しうるのであって、たとえば、1オンスの金の価値は $\frac{1}{2}$ 労働時間に、あるいは2労働時間になりうること、しかし金の価値がいかように變動しようとも——また變動せずとも——つねに1オンスの金は1ポンドという貨幣称号をもって呼ばれること——この二点に留意しておく必要があるのである。

まず、表式の(1)について。表式全体を通じて指摘されなければならないことであるが、たとえば、亜麻布について、20エルレの亜麻布の価値は「それ自体として直接に表現されえない」のであって、この場合、金(≡貨幣商品)の一定分量によって示されざるをえない、すなわち、 $20\text{エルレの亜麻布} = 2\text{オンスの金}$ として示される。2オンスの金は、 $20\text{エルレの亜麻布の価格である}$ 。この等式の基礎には、 $20\text{エルレの亜麻布の価値も、2オンスの金の価値もひとしく2労働時間である}$ ということがある。  $20\text{エルレの亜麻布} = 2\text{オンスの金}$  という等式は、いわば、

$20\text{エルレの亜麻布}$  という形態を採った2労働時間 =  $2\text{オンスの金}$  という形態を採った2労働時間 ということを示しているとも考えられるのである。かようにして、  $20\text{エルレの亜麻布} = 2\text{オンスの金}$  という等式は亜麻布の価値表現として、しかも貨幣商品による価値表現として唯一適切なものであるが、しかし、この等式にそのまま  $2\text{ポンド}$  という貨幣称号をば、それらに直接等しいものとして附け加えることは、まったく當を得ない。 $20\text{エルレの亜$





くメの鈴 という関係、だけである。この等置関係の意味するところは、20、エルレの亜麻布の価値が2オンスの金に等しい、ということである。この場合、もし1オンスの金を1ポンドという貨幣称呼で表現するとすれば、右の「等置関係」は、20エルレの亜麻布の価値は金2ポンドに等しい、というように云いかえることができる。しかし、このように云いかえたとしても、これは、 $2\text{アリン} = 2\text{ポンド}$  などという「関係」を示したりするものではない。20ヘルレの亜麻布 $\equiv$ 鈴2ポンド、という等式は、たんに、20ヘルレの亜麻布 $\equiv$ 24くメの鈴 という等式を、金1オンス $\equiv$ 金1ポンドという基準で云いかえたものとしてのみ、意義をもちうるのである。だが、かく云いかえたとしても、20エルレの亜麻布の価値は、けっして2時間などというように規定されえない。むしろ、20エルレの亜麻布の価値は3時間であろうと、4時間であろうと、かまわないのである。つまり、20ヘルレの亜麻布 $\equiv$ 24くメの鈴 および、これを云いかえたものとしての 20ヘルレの亜麻布 $\equiv$ 鈴2ポンド、という等式においては、20エルレの亜麻布の価値量の絶対的規定は全く問題にならない、たんにその相対的規定のみが問題なのである。したがって、20ヘルレの亜麻布 $\equiv$ 鈴2ポンド、という等式（価格表現）においては、20エルレの亜麻布の価値の絶対量は問題とならず、いわゆる亜麻布などのごとき特定の商品についての価値からはなれて、一般に単位労働時間を貨幣称呼で表現する（たとえば、 $1\text{アリン} = 1\text{ポンド}$ ）などということはこの場合全然お話にならないことである。このように考えてくると、「 $2\text{アリン} = 2\text{ポンド}$ 」という関係が存在する」という氏の指摘は、さきに挙げた「電力料金」式頭脳のそれと全く軌を一にするものであるといわざるをえない。1ヤロフ $\equiv$ 1アリン $\equiv$ 8円 に代って、 $2\text{アリン} = 2\text{ポンド}$ 、1

表式の(1)については、さらに、(回算式 $\equiv$ 回算式) という、氏独特の表現に注意する必要がある。 $a\text{アリン} = b$

回算式 については、さきの「電力料金」式頭脳に準ずるものとして、その「根拠」は容易に知られる。この  $a\text{アリン}$

Ⅱ b 論議 から Ⅱ 論議 Ⅱ 論議 への「移行」の「根拠」はしかく容易にはうかがわれないが、しかし、a 時間は  
 この場合では20エルレの亜麻布の価値、すなわち2時間であり、b 価格は2ポンドであり、2ポンドは、金2オン  
 スすなわち2時間であるというように「推論」していった結果のものと考えることができる。このことは、③の中で  
 氏自身明示しているところの言葉——「同じ大きさの価値量(価値表現としての価格)で表現される」——によつ  
 て裏書きされている。したがって、20エルレの亜麻布も2時間、2ポンドも2時間であるから、かくして、Ⅱ 論議  
 Ⅱ 論議 になるというわけである。このような主張は、一見もつともらしい体裁をもっているが、すこしく立ちい  
 ってみれば、それが論理的にみてさえまつたく成り立ちえないものであることは容易に知られる。Ⅱ 論議 Ⅱ 論議  
 という等式をつくり出すために、氏は、一方に20エルレの亜麻布を金とは無関係に、それ自体として取り出し、その  
 価値は2時間であるとする。さらに、これと全く無関係に2ポンドを取り出し、その価値は2時間であるとする。さ  
 て、そこで両者をつきあわせて、かりに  $20 \text{ エルレの亜麻布} \parallel 2 \text{ ポンド}$ 、ということになるならば、それは、 $2 \text{ 罫}$   
 $\parallel 2 \text{ 罫}$  ということであり、まさしく、Ⅱ 論議 Ⅱ 論議 Ⅱ 論議 ということである、と『結論』づける。このような  
 「論理的」手続きならば、小供でも考え出せるようなものである。——鉛筆1本の価格は10円、ドーナツ1個の価格  
 10円ときには、 $2 \text{ 本の鉛筆} \parallel 2 \text{ 個のドーナツ}$  …… Ⅱ 論議 Ⅱ 論議 Ⅱ 論議 だが、このような幼稚な「論理的」手続き  
 は、商品の価値表現の問題にたいしては、いささかも関係するところはない。この場合、まず堀江氏の「論理的」手  
 続きなるものが、まさに通常の論理をまったく顛倒させてしまう底のものでしかないことに注意せねばならない。当  
 面の事柄は、はじめに20エルレの亜麻布と金2ポンドとそれぞれ別箇に存在していて、それぞれの価値をもっていた  
 ものが、ここに相会して関係を結ぶ、というようなことではけつしてない。はじめにある——そして最後までそれ以

外に存在するものがない——のは、20 エルレの亜麻布の価値が2 オンスの金に等しい、ということである。すでに最初からして、20 エルレの亜麻布の価値は、2 オンスの金に等置されており、かくして金2 ポンドをもって表現されているのである。20 エルレの亜麻布 = 2 オンスの金(又は金2 ポンド) という等式は、 $2 \parallel 2$  というようなたんなる等量関係を示しているものではないのである。それは、商品の価値すなわち20 エルレの亜麻布の価値を表現する関係であり、一商品と他の商品との価値関係を示すものにほかならないのである。このような点から見ただけでも、氏の所論が価値表現の意味、したがってまた当然にもマルクス価値論の一大支柱を成している価値形態論の基本的意義の完全な没却の上のみ成り立っていることは、うたがう余地がないようである。①についての検討は、ひとまず以上をもって切り上げ、つぎに、②および③についてみてみよう。

## (I)

「表式 I」の中にかかげられた(2)および(3)は、いずれもひとしく「生産性向上の結果」を示すものとされている。両者ともに「生産性が二倍に向上した結果」でありながら、一方は「各商品にふくまれている労働時間が半減する」ことになり、他方は「同一労働時間で各商品が二倍できるようになる」ことになり、しかも、この二つの「結果」がそれぞれ内容を異にするものとして挙げられ、説明されているのである。このような現象は、理論的、論理的かつ心理的にみても、まことに興味ある研究対象といわねばならないが、当面これについて立ちいることをさしひかえ、ここでは簡単にこの現象そのものの現存を指摘しておくにとどめよう。

(2) この点については、次節—三「労働の生産性」の問題—で究明がおこなわれるはずである。

(2)においては、「生産性向上の結果、各商品にふくまれてゐる労働時間が半減する」とされており、したがって、20エルレの亜麻布の生産に要する労働時間も、2オンスの金にふくまれる労働時間も、ともに2時間から1時間に減少するものとされる。そこで、たとえば、一商品、20エルレの亜麻布の価値はつぎのようにして示される——20ハンテの亜麻布=24クメの金。1オンスの金の貨幣称呼は金1ポンドであるから、右は 20ハンテの亜麻布=24クメの金、というようにも示される。(1)の場合においても、20エルレの亜麻布の価格は金2ポンドであった。(2)の場合も、同じく20エルレの亜麻布の価格は金2ポンドであり、いづれの場合にも20エルレの亜麻布の価値の金による相対的価値表現には変りがない。このことは、価格形態の意義を理解している者にとっては、当然すぎるぐらい当然のことである。だが、これら二つの場合について、氏の主張するように、「第一の場合には二時間は二ポンドという貨幣単位で表現されていたのに、いまでは一時間が二ポンドで表現されることになる」という『結論』をひきだすことは、まったく当を得ないものといわなければならない。そもそも「第一の場合には二時間は二ポンドという貨幣単位で表現されていた」というのは誤りである。(1)において2ポンドという価格で表現されていたのは、20エルレの亜麻布の価値である。しかも、この2ポンドというのは、たんに2オンスの金の貨幣称呼にすぎず、2オンスの金を呼び変えたものにすぎない。2ポンドが20エルレの亜麻布の価値を表現するものとなりえているのは、ひとえにそれが2オンスの金の呼び名 (Name) であるからであり、また、2オンスの金をたんにいいかえただけのものである場合にかぎってそうなのである。それゆえ、「二時間は二ポンドという貨幣単位でも表現されていた」という命題は、正しくは「20エルレの亜麻布の価値は2オンスの金によって表現される」、すなわち、20ハンテの亜麻布=24クメの金」という命題におきかえられるべきであり、また、そのように置きかえられるかぎりにおいて右の価値表現が成り立つ。

同様にして、(2)の場合について、「いまでは一時間が二ポンドで表現される」という命題も、「同じく20エルの亜麻布の価値は2オンスの金、または金2ポンドで表現される」と置きかえられねばならぬ。このようにして、たんなる労働時間ではなくして商品、価値の表現の問題であることを明確にし、2ポンドという貨幣称号をそのたんなる名称ではなしにその現実の内容に正しく還元して(1)および(2)の場合を考察すれば、事理すこぶる明白となるはずである。

ところが、商品、価値の表現が問題であることを忘れ、これをたんなる労働時間(これは、「労働量」である)の表現が問題であると思ひこむときには、③のような「なんとも理解のしようのない」主張がつくり上げられることになるのである。まず、③の最後におかれた「いまではより、少ない労働量(価値量)が、同じ大きさの価値量(価値表現としての価格)で表現されることになる」(傍点—堀江氏のもの)という、結論的主張に眼を向けてみよう。ここに述べられている表現関係は、(2)に示されたとおり、 $20\text{ エルの亜麻布} \equiv 2\text{ ポンド}$  という関係にほかならない。すなわち、「より少ない労働量(価値量)」というのは、 $20\text{ エルの亜麻布の価値のことであり、それは、「これまでよりも生産性の向上した」労働での1労働時間に相当する。これにたいして、「同じ大きさの価値量(価値表現としての価格)」と云われているのは、金2ポンドのことである。では、2ポンドの価値は、どうなっているか? 金2ポンドは、金2オンスの貨幣、称号にすぎないから、金2ポンドのあらわす価値というのは、金2オンスのもつ価値と同じでなければならぬ。金2オンスの価値は? といえは、それは、まさしく、「これまでよりも生産性の向上した」労働での1労働時間に等しい。すなわち、 $20\text{ エルの亜麻布} \equiv 2\text{ ポンド}$  ということは、 $20\text{ エルの亜麻布} \equiv 24\text{ グラム}$  の如きということであり、この両者の価値は、さうぶれも「生産性向上の結果」としての労働1時間分である。堀江$

氏の好みの表現を用いれば、(生産性の向上した)I製品=(生産性の向上した)I製品 ということになる。このようにして、「生産性の向上の結果」においても、20 エルレの亜麻布の価値の表現は、これまでどおり、いささかも変りない。そして、このことは理の当然である、というのは、20 エルレの亜麻布の価値は、「それ自体としては直接に表現されるのではなく」、金の一定量によってのみ相対的に表現され、しかも、両者の価値が同じ方向に同じ率をもって変動するかぎり、金による亜麻布の相対的価値表現そのものには変化がありえないからである。<sup>(3)</sup> このような場合に両者の関係が——堀江氏の好んで用いる独特の表現様式をかりれば——つねに『 $20 \text{エルレ} = 20 \text{製品}$ 』であることは、いまさらいまでもない。ところが、なんと、「近代経済学の成果を積極的に取り入れること」を呼号している堀江氏は、『 $20 \text{エルレの亜麻布} = 2 \text{ポイント}$ 』を以て、『**より少ない労働量**』(=1時間)=『**同じ大きさの価値量**』(2時間)と考へ、かくして、『 $20 \text{製品} \wedge 20 \text{製品}$ 』という、まことに奇怪な『**数学的**』表現をかかげているのである。これは、また、すばらしい『**創造的發展**』の結実ではあるまいか!

(3)  $20x = 2y$  の関係がある場合、 $x$  および  $y$  の値が同じ方向に同じ率をもって変化するならば、つねに  $20x = 2y$  という関係が成り立つ、ということぐらい、初等数学を学んだほどの者ならば、誰にもすぐわかることである。さきに本稿の第一節(一)「労働者人口法則」について)においてもすでに眼のあたり具体的实例をみせつけられたばかりであるが(前稿—本誌第十二巻第四号、七三—七六ページ参照)、われわれは、またしても、「近代経済学の成果の積極的撰取」をなしとげつつあるわが堀江氏の模範的な『**数学的**』方法の实例を与えられたわけである。

なお、問題を初等数学の面から価値表現の問題の領域に移していうならば、堀江氏によってその「根本的、原則的誤り」を摘発された当のマルクスは、おなじみの『資本論』第一巻第一章第三節の中でとくに「(b) 相対的価値形態の量的規定性」と題された一小節を設け、両商品の価値の変動が「価値の大きいさの相対的表現におよぼす影響」を「詳しく研究し」ており、さらに同じく第三章第一節において価格を論究するにあたっては、「諸商品価格の運動にかんしては、総じて、以前に展開され

た簡単な相対的価値表現の諸法則が妥当する」と述べて、価値変動と諸商品価格の変動との関係を詳細に説明しているのである。それゆえ、初等数学の点はさておき、通常の読解能力のある者ならば、価格変動の意味はこれによって容易に理解されえ、したがって、 $\frac{1}{2}$  時間  $\parallel$   $\frac{1}{2}$  時間 とか、さては、 $\frac{1}{2}$  時間  $\vee$   $\frac{1}{2}$  時間 などといった表現の虚妄のほどはすぐにはわかるのである。

では、何故に、堀江氏は、その(2)において、 $\frac{1}{2}$  時間  $\wedge$   $\frac{1}{2}$  時間 すなわち、「より少ない価値量 ( $\parallel$  1 時間) が、同じ大きさの価値量 ( $\parallel$  2 時間) で表現される」というような、『結論』に陥ったのであろうか？ そのより深い原因はさておき、③にあらわれたかぎり、その直接の原因の主なものを取り出してみよう。

第一に指摘されるのは、「労働量(価値量)」という言葉についての、無原則的な理解である。このことは、たとえば、20 エルレの亜麻布に「ふくまれている労働量(価値量)は、最初は、2 時間であったのに、いまでは1 時間に減少した」という主張の中に端的に示されている。たんなる数量としてみれば、なるほど最初は2 時間であり、のちには1 時間である——2 から1へ！。だが、価値が問題となるかぎり、これをたんなる数量関係として、2 対1としてみることは誤りである。なぜならば、価値を規定する労働は、一定の社会的平均的労働として、特定の質をもったものでなければならぬからである。第一の場合における労働は、第二の場合に比して、その生産性が『半分』の労働である。逆にいえば、第二の場合における労働は、第一の場合に比して生産性が『倍加』されている労働である。それゆえ、「最初は2 時間であったのに、いまでは1 時間に減少した」というのは、正しくは、「最初は生産性一の労働で2 時間であったが、いまでは生産性二(さきの一にたいして二倍をあらわす)の労働で1 時間になった」というべきである。生産性一の2 労働時間と生産性二の1 労働時間と、どちらが「大きい」か「小さい」かは、もとより問題にすることはできない。両者の質が異なるのであるから、直接量的比較はできないのである。だが、質の問題を別とし

でも、当面問題は労働時間にあるのではなくて、価値に、しかも商品の価値に在ることを銘記しなければならぬ。この場合、問題は20、エルレの亜麻布がどれだけ価値をもつかにある。しかも、その価値は、直接に、絶対的にはとらえられず、相対的にのみ表現されるにすぎない。すなわち、20エルレの亜麻布について、その相対的価値表現こそが問題となりうるし、問題とならねばならぬ。しかるときは、第一の場合には、20エルレの亜麻布の価値は、生産性の2労働時間であるが、これは直接に、絶対的に表現されえないで、たんに相対的にのみ表現されねばならず、2オンスの金によって相対的に表現される。第二の場合には、その価値は、生産性の1労働時間に相当するといえ、ここでも相対的にのみ、2オンスの金によって表現されねばならぬ。かくして、第一の場合にも第二の場合にも、20エルレの亜麻布の価値を表現するものは、ひとしく2オンスの金となる。すなわち、いずれの場合にも、その相対的価値表現そのものには変りがない、同一不変なのである。

第二に挙げなければならないのは、「 $\frac{1}{2}$ ポンド」 $\frac{1}{2}$ ポンド」という氏の「等式」に端的に示されているところの、価格そのものにかんする混乱した理解である。ポンドを労働時間に直結することは、抽象的・人間的労働の量をそのままポンドという貨幣称呼で直接に表現することになる。なぜならば、ポンドそのものは商品でもなく、価値をもたないからである。価値をもたず・それ自身価値でもない・たんなる貨幣称呼がそのまま労働時間を表現するとすれば、これは、労働量の大きさを直接に表示するものとならざるをえない。だが、商品の価値が、同じく価値をもつ商品によってでなければ、いいかえれば他の商品によって相対的にでなければ表現されえないことは、価値の本性からして自明のことである。金が商品の価値を相対的に表現しうるのは、それ自身労働生産物であり、価値をもつ——したがって価値の変化しうる——商品であるからである。ポンドが商品価値を表現しうるのは、ただ、ポンドが商品価値を



さて、以上のようにして、われわれは、表式の(2)について堀江氏が主張している『結論』の因って来る原因について、そのもっとも主だったものと覚しきものを二つ挙げて検討してみたのであるが、以上の検討を通じて、われわれは、ここに重大な発見をなしうる緒口を与えられたように考える。それは、氏がその大著の第二十四章の表題としてかかげたところの、「同一労働時間はつねに同一価値量を生むか?」という、こけおどかしの文句の理論的意味が以上によってほぼ判然としてきたからである。

理論的に厳密にいうならば、もともと「同一労働時間はつねに同一価値量を生むか?」などという文句は、およそ問題にはなりえない。科学的な労働価値説の立場に立ち、価値の量的規定を労働量に求めるならば、当然に一定量の労働時間は一定量の価値を生む、すなわち、同一労働時間はつねに同一価値量を生むものとせざるをえない。質的に相異なるものについても直接的比較をなして平然としている単純粗雑な頭脳を予想して、いささか厳密に表現しておくならば、「同一の質の労働の単位時間、したがって、社会的平均的労働の1時間は、つねに一定量の価値を生む」といふべきである。もしこの種の単位時間の生み出す価値量が一定でないとしたら、およそ、価値の量的規定は不可能になり、そもそも価値規定そのものが無意味なものとならざるをえない。したがって、理論的見地に立てば、右のようなこけおどかしの文句は、およそ量的規定には基準の単位が一定したものととして与えられなければならないという自明の公理以上にはならぬ意味をもちえないものとして、したがって、理論外の問題として片づけられるのが落ちである。ところがである。わが世紀的「創造的發展」者、堀江氏が、ことさらその大著の末尾を飾る終章のテーマにこの文句を選んだのである。どうして、右のような自明の公理として片づけられるような内容のものであつてよいであらうか!

さきに③の内容について詳細に吟味したところですでに明らかにされたとおり、堀江氏は、労働時間について、その質的差異をまったく捨象して、異なった質の労働もこれを全く同一の質のものとして（おそらく、無意識的に）単純に、かつ直接に、2時間対1時間というように、量的比較をおこなっている。第一の場合の1時間も、第二の場合の1時間も、1時間としてはまったく同じである、という論法である。（なるほど、1はつねに1と同一である！）。第二十四章の表題の「同一労働時間」という言葉は、この「どの1時間も、1時間としては同一である」という論理にもとずくところの「同じ1時間」を意味するものである。では、「同一価値量」の方はどうか？ これは、さきに見た堀江氏独特の「等式」——「 $\text{価値量} \propto \text{労働時間}$ 」——をこのさい思い浮べれば、その内容をとらえるのはさまで困難ではないはずである。すなわち、この「等式」によって明らかに示されており、氏自身の「同じ大きさの価値量（価値表現としての価格）で表現される」③（1）という主張そのものに裏書きされているとおり、「同一価値量」というのは、「同じだけのポンド」ということにすぎない。これを要するに、「同一労働時間はつねに同一価値量を生むか？」という、大言壮語的テーマは、「同じ1時間は、いつでも同じだけのポンドであらわされるか？」という、まことに他愛のない、幼稚粗雑な愚問を「創造的」に表現しただけのものなのである。これを堀江氏の愛好される数式を用いて表現するならば、「同一労働時間はつねに同一価値量を生むか？」ということは、「 $\text{価値量} \propto \text{労働時間}$ 」がつねに成り立つか、成り立たないか？ということであり、その本当の意味——すなわち、超ノンセンスぶり——は、すでにわれわれによって吟味ずみのところなのである。それゆえ、結論的にいうならば、第二十四章のテーマそのものが、すでに、価値と価格にかんするわが「創造的發展」家の実績のほどを端的にしめす一指標となっているということができるのである。そこで、われわれは、なお、表式の③および④にかんして氏の展

開しているところを検討することにしよう。

(三)

表式の(3)にかかげられているのは、「生産性向上の結果、同一労働時間で各商品が二倍できた」場合である。さき(2)の場合も、同じく「生産性向上の結果」であり、「各商品にふくまれている労働時間が半減する」ことになってしたが、同じく「生産性向上の結果」として、一方では「同一労働時間に各商品が二倍でき」、他方では「各商品にふくまれている労働時間が半減する」ことになり、しかも、これら二つの場合が、それぞれ性質の異なつたものとして、(2)および(3)として別々に示されているのである。ところで、「同一労働時間で各商品が二倍できる」ことになる、当然に「各商品にふくまれている労働時間が半減する」ことにならざるをえない。両者は、それ自体としては、内容的にまったく同じものであるし、同じものでなければならぬ。にもかかわらず、堀江氏がことさら(2)と(3)とを区別し、これを別々にかかげているのは、何故か？ それは、おそらく、(2)と(3)との唯一の差違、すなわち、一方が「計 一四ポンド(七時間)」であるのにたいして、他方が「計 二八ポンド(二四時間)」であるという点にもとづいていゝものである。のちに見られるように、堀江氏は、「総計」すなわち、「総価値」および総価格に異常の關心をよせ、この観点からもマルクス労働価値説の「根本的誤り」を指摘しているのである。ただ、のちの展開のためにつきのことを附け加えておくのは無駄ではないであろう。それは、これまで「総計」が「十四時間(十四ポンド)」であつたものが、「生産性向上の結果」として、かえつて、「総計」が「七時間(十四ポンド)」に半減するという、まことに驚倒すべき事態がここに示されているということ、かくして、社会はその「生産性の向上度に正比例して」

その総価値が減少してゆき、わが堀江氏の「生産性の向上度に正比例して、その総価格はふえてゆく」という断定(⑨)と直接矛盾するという窮地に追い込まれざるをえないということである。

④においては、「生産性向上の結果」として、「こんどは、以前と同じ二時間の労働量(価値量)をふくんでいるのは、使用価値として以前の二倍の量をもつ四エムレの亜麻布であるが、その価格(価値量)は、以前の二倍の四ポンドとなる」と述べられている。この「価格(価値量)」という言葉がなかなか意味深長であること、それがいつのまにか本物の価値量に早変わりして「同価値」に「生成」してしまうであろうこと——こうしたことは、すでにわれわれには先刻おなじみのところである。が、なお念のため、右のような氏の主張をお好みの数式を用いて簡潔に表示してみよう。

40エムレの亜麻布の価値量 = 2時間 = 以前と同じ

40エムレの亜麻布の価値量 = 4ポンド = 以前の2倍

∴ 40エムレの亜麻布の価値量 = 以前と同じ **また同時に** 以前の2倍

まことに美事な背理というのほかないが、しかし、このように氏の主張を数式的に表現すれば、その背理を通してその裏にあるもの、すなわち、「以前と同じ」および「以前の2倍」というのはまさしく価格の貨幣称呼にほかならないことをうかがうことができるのである。

したがって、右のような背理にもとづいて、氏が、⑤において、「マルクスが『同じ労働は、生産力がどう変動しよう、同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生み出す』といったのは誤りである」(傍点—堀江氏のもの)との断定を下しているとしても、それはむしろ理の当然というべきであり、まことにもっとものことなのである。さき

に「第二十四章」の大言壯語的テーマそのものの内容を考察しおえたわれわれにとっては、右のマルクスの言葉そのものが「1時間の価値は1ポンドであるか、2ポンドであるか?」というような「電力料金」式問題提起とはまったく無縁であること、1時間の相場を追っかけてまわしている理論的山師にとってマルクスの右の言葉がなんの足しにもならないことは、ただちに察しがつくのである。

ところで、右のようにマルクスの命題の誤りを首尾よく断定しおえた堀江氏は、ここで『理論家』にふさわしく、ありうべき「反論」を想定して、あらかじめこれにたいして駁撃を加えることを忘れていない。その「反論」の論拠として、氏はマルクスの文章をことさら選んでかかっているのであるが、このまた選択なるものがきわめて特徴的であり、当面はなほだ教訓的なものである。まず、マルクスの文章を挙げてみよう。

「金の価値變動は、また、価値尺度としての金の機能を妨げるものでもない。それは、すべての商品に同時に影響し、かくして、他の諸事情が同等ならば、すべての商品の相互的な相対的諸価値を——それらは今やすべて以前にくらべてより高い・またはより低い・諸々の金価格で表現されはするが——不変のまましておく」(インスティトゥット版第一卷一〇四ページ、訳(1)——二二二ページ、傍点——マルクス、ゴジック体——山本)。

堀江氏は、この個処をとくに二つに分け、最初の文章を括弧付きで引用して、「とிட்டではないか、と抗議する読者があるかも知れない。」と述べ、しかるのち、第二の文章を挙げて、これに「のだから、さしつかえなからう」と。と附言している。これが、氏によってあらかじめ想定された「反論」のすべてである。だが、いったい、これは、たんに形式的にのみみても、「反論」として認められるようなものであろうか? ⑤をみればただちに判るように、

「反論」は、当然、マルクスが「同じ労働は、生産力がどう變動しようとも、同じ時間内にはつねに同じ大いさの価

値を生む」と云つたのは誤りではない、正しいのだ、ということを主張するもの、あるいは、これを論証するものでなければならぬ。だが、「反論」の論拠として挙げられた二個の文章は、いったい、どこに、どうして、右のマルクスの文章と直接に関係をもっているであろうか？ 右のマルクスの文章は、価値規定について述べたものであり、二個の文章は、貨幣の価値尺度としての機能について述べたものである。一步譲って、右の価値規定にかんするマルクスの文章を「電力料金」式頭脳にならって、「1時間はつねに1ポンド」と読みちがえたとしても、二個の文章はこの「1時間はつねに1ポンド」という「主張」を裏付けるものとは、けっしていえない。第一の文章が右の「主張」と全然無関係であることは明白であり、第二の文章にしても、ゴシック体で示したように、むしろ、「金価格による表現はつねに一定ではなく、金の価値変動につれて上下する」と明確に述べているのである。したがって、わが堀江氏が、これら二個の文章にわざわざ「といったではないか、と抗議する読者があるかも知れない」とか、「のだからさしつかえなからう、と」などといった言葉を附け足して、「反論」としての体裁をむりやりとりつくろっているのは、まことに見当はずれで、お気の毒というのほかないのである。しかし、われわれ読者とちがって、右のような「反論」を想定した堀江氏には、これを美事に駁撃しおえなければならぬという仕事が残っている。この、氏による駁撃が⑥および⑦に述べられているところである。

⑥においてみられるように、氏は、金のみの価値が変動した場合の数式をさきの「表式I」の中に、(4)としてかかげ、これについて論駁をすすめている。まず、氏はいう、——「こういうときにも、金貨幣が、他の諸商品にふくまれている労働量（価値？）の相対的な比率を表現する機能はならぬ妨げられない。これはマルクスのいうとおりである」と（ゴシック体—山本）。「価値（労働量）の大きさはそれ自体として直接に表現されるものでない」ということ、

「それは金によつてのみ、相対的に表現される」ものであることは、氏自身、その問題提起にさきだつて、われわれに明言していたところである。そして、これらのことは、金の価値がたとえどのように変化しようとも、妥当するものでなければならぬ。(4)の場合のように、金のみの価値が $\frac{1}{2}$ に減少すれば、金による商品価値の相対的表現は、当然に2倍に増大しなければならぬ。マルクスのいうとおり、「諸商品価格、……諸商品価値が同等不変ならば貨幣価値が減少する場合にのみ、一般的に騰貴しうる」(前出、第一巻、一〇四ページ、訳(1)―二二二ページ、傍点―マルクス)。したがつて、20エルの亜麻布の価値は、依然として2時間でありながら、4オンスの金をもつて、したがつて、金4ポンドという貨幣称号をもつて表現されるのである。ところが、右のように、マルクスの文章を前置きとしてことさらに挙げておきながら、ここでは、氏は「だが」といつて、「二〇エルの亜麻布は、以前もいまも二時間という同一労働をふくんでいるのに、その価値? (価格) は二ポンドから四ポンドにあがっているのだ」という主張をかかげるのである。このような主張が錯乱的『結論』にすぎないことは、さきに検討したところで明白であるが、なお、ここで、氏の論法の特徴について若干考察しておこう。

まず、⑥の中で、わたくしが、ゴシック体をもつて示した言葉に注意されたい。ゴシック体をもつて示したのは、「他の諸商品にふくまれている**労働量**(**価値?**)」と、20エルの亜麻布についての「その**価値?**(**価格**)」との、二つである。いまさらいうまでもなく、マルクスの価値規定は「労働による**価値規定**」であり、その内容をいささか定式化して表現すれば、「商品の価値の大きさは、社会的に必要な労働時間によつて規定される」ということである。そこで、たとえば、20エルの亜麻布の中に社会的平均労働2時間がふくまれているとすれば、20エルの亜麻布の価値(厳密には、価値量)は、労働2時間である。2労働時間が20エルの亜麻布の価値である。このような価値規

定の内容からみると、氏の「労働量(価値?)」という言葉は、いったい、どのようなことを意味しているものであろうか? 「価値」という言葉にことさら「?」を付けているのは、どういうことか? いったい、2労働時間(「労働量」)は、20エルレの亜麻布の価値であるのか、ないのか? それが20エルレの亜麻布の価値であるのはもとより当然のことであるはずである。もし、それが亜麻布の価値でないとするならば、問題ははじめから成り立たない。ところで、第二の「その価値?(価格)」についても、なんのための「?」であるのか? さきの「労働量(価値?)」についていえば、「労働量」と「価値」とは、まだ直接関係があり、見方によっては同一物の異なった表現とみられる。しかし、「価値」と「価格」とでは、事柄は根本的に異なる。いったい、2ポンドとか4ポンドとかいっているのは、「価値」であるのか、「価格」であるのか? 「価値」に「?」をつけた「価値?」という言葉は、いったい、どのような内容をもっているのか? もしそれが、「?」つきでもあれ、「価値」であるというならば、20エルレの亜麻布の価値は、依然として2労働時間であり、同一不変であるといっているのに、同じ価値が2(ポンド)から4(ポンド)へ変動するのはどうしてであるか? ——このように、当然の疑問を提出してみただけで、堀江氏の主張の实体はただちに明らかとなるのである。それは、理論の問題などではなく、たんなる論理上の問題でしかない。

ところが、驚いたことに、⑥においては、右のように、「?」をつけて本物の「価値」だか偽物の「価値」だか判らないようなアイマイな表現を用いながら——わが「創造的發展」家の、なんと自信のない表現であることよ! ——つぎの⑦においては、にわかに関き直って、「つまり、マルクスの例によって考えても、同じ労働時間が同じ価値を生みだす、という命題は通用しない」というように、「価値?」は本物の「価値」に化けてしまい、天降りの『結論』が突如として下されているのである。「価値?」を美事に本物の「価値」にすりかえた氏の手並のほどを、まず

嘆賞されたい。

しかし、すりかえの手並を別とすれば、右のような「…命題は通用しない」という氏の断定は、いかんながら、一般にはとうてい通用しえない、代物である。20 エルレの亜麻布の価値は、いまも2労働時間、先きも2労働時間、変りはないのである。この「命題」が例によって、「1時間いくら」という、「電力料金」式頭脳の産物であることはいまさらいうまでもないところであるが、このような性質の頭脳は、さらに、この「命題」をば「同じ労働時間は同じ労働時間(価値?)」である、という同義反復」に還元しないではおかないのである。かくして、マルクスの価値規定は、「?」入りの「同義反復」として、簡単に片づけられてしまうのであって、われわれは、ここに重ねて、わが「創造的發展」家の消化能力の偉大さに驚かさざるをえないのである。しかし「發展」家は、たんに消化(≡消費)するだけにはとどまらないでさらに積極的に發展させる能力を持っていることを示さねばならない。それが、⑦の後半で示されているつぎの主張である。

「同一労働時間が同一価値(価格)を生み出すというのは、金の生産性が不変なときだけ通用する話である。金の生産性に變化が起つた場合には、同一労働時間(同一価値量?)の生産物はちがつた大きさの価値?(価格)によって表現されねばならないのである」(ゴシック体—山本)。

「価値量?」という、「創造的發展」家にきわめて似つかわしくない文字は一応見すごして、この主張の内容を検討してみよう。すでにこれまでの考察によっても明らかにうかがえるところであるが、右の主張は、商品の価値について述べているものではけつてないこと、それがひたすら問題にしているのは、商品の価値ではなくして、1時間というような、労働時間だけであるということを、まず指摘しておかなければならない。価値はなんらかの使用価値

に対象化したもの、いいかえればなんらかの商品の価値としてのみ問題となりうること——このことは、右の主張をかかげる論者にとってはまったく無縁のことなのである。要するに「1時間何ポンド」ということだけが問題になっているのである。そこで、氏による「積極的發展」の手続きは、つぎのような簡単なものとなる。表式の中から、たとえば(1)をとってきてもよい。

$$\begin{array}{l}
 20 \text{ エルの 粗麻布} = \\
 1 \text{ 枚の上衣} = \left. \begin{array}{l} 2 \text{ オンスの金} = 2 \text{ ポンド} \\ (2 \text{ 時間}) \end{array} \right\} \dots\dots\dots
 \end{array}$$

商品の価値ではなくして、商品から引き離された、たんなる労働時間(労働量)をとり上げるということは、右の等式において、諸商品を「消去」して、労働時間だけをとり出すことを意味する。諸商品を「消去」すれば、つぎの等式が得られる。

$$\begin{array}{l}
 2 \text{ オンスの金} = 2 \text{ ポンド} \\
 (2 \text{ 時間}) \\
 2 \text{ 時間} = 2 \text{ ポンド}
 \end{array}$$

この等式は、労働時間とポンドとを直結させるものであり、ここからして、

という等式がただちに導き出されることは、さきに見たとおりである。しかし、この最後の等式が導き出されるためには、つぎの条件が必要である。すなわち、 $2 \text{ オンスの金}$ と $2 \text{ 時間}$ との関係が同一不変であることである。二オンスの金がつねに二時間をふくむこと、いいかえれば、「金の生産性が不変なときだけ」、つねに  $2 \text{ 時間} = 2 \text{ ポンド}$  であり、かくして、「同一労働時間が同一価値を生み出す」ことになる。要するに、氏による「積極的發展」なるもの

は、簡単な数学的「消去」をひとつ応用しただけのものであり、その内容は、「1時間何ポンド」という「電力料金」式計算に、金を結びつけただけのものようである。かくして、「金の生産性」という「要素」は本来附け足し以上の何物でもないため、その「理論的」体裁にもかかわらず、とどのつまりは、「同一価値量?」の生産物はちがった大きさの価値量? によって表現されねばならないのである」などといったような、? 付きの超ノンセンスをもつて結末をつける仕儀と相成っているのである。

ところが、「同じ価値量がちがった大きさの価値量で表現される」というような、文字どおりの背理も、その定立者自体にとっては、「量的不一致」の現存という、「真理」を啓示しないではおかない。 ㊦㊧㊨㊩㊪㊫ ㊬㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 「同じ価値量」と「ちがった大きさの価値量」とのあいだに新種の「量的不一致」を発見した氏は、ついで、「この量的不一致をなくす方法」なるものまで思いを致し、かくしてここにまったく新たに「理論的に二つ」の方法なるものを案出している。その「一つ」は、「金の生産性は絶対に変化しない、と仮定すること」である。「変化しない」と「仮定」しさえすれば、この「仮定」という「方法」によって「不一致」がなくなってしまう、というのは、氏自身の言葉をまつまでもなく、まことに「現実を無視した考え方」であり、これでは「量的不一致」はなくなりようがない。そこで、「現実を無視しない」方法、より現実的な「考え方」として、「第二の方法」が挙げられる。氏の推奨する「第二の方法」とは、「金の生産性の變動に正比例して、同じ名前の貨幣単位にふくまれる金の分量を増減すること」であり、「たとえば、金一オンスが一ポンドであったとすれば、金の生産性が二倍にあがったら二ポンドを一オンスとする」ことだそうである。この「第二の方法」についても、氏は、「しかし、実際には、そんなに器用に一ポンドの表示する金量を時々刻々かえることはできないし、それができたとしたら、貨幣が貨幣の役を果さなくなる」と述べ



場合なのだから」  $\text{金} 2 \text{オンス} = 1 \text{ポンド}$  となり、したがって

$$\begin{aligned} \text{金} 2 \text{オンス} &= 1 \text{ポンド} \\ &= 1 \text{時間} \end{aligned}$$

とならなければならない。すなわち、つねに  $1 \text{ポンド} = 1 \text{ポンド}$ 、であるためには、 $\text{金} 2 \text{オンス} = 1 \text{ポンド}$ 、でなければならぬ。ところが、わが堀江氏の「創造的發展」説によれば、「金の生産性が二倍にあがったら、二ポンドを一オンス」とすべきであるというのである。つねに  $1 \text{ポンド} = 1 \text{ポンド}$ 、であるためには、 $2 \text{ポンド} = 2 \text{ポンド}$ 、という関係が成り立たねばならない。ところが、金の生産性が二倍にあがったのであるから、 $\text{金} 1 \text{オンス} = 1 \text{ポンド}$ ではなくして、 $\text{金} 1 \text{オンス} = \frac{1}{2} \text{ポンド}$  という関係が成り立っているのである。したがって、「2ポンドを一オンス」ということは

$$2 \text{ポンド} = 2 \text{時間} = \text{金} 1 \text{オンス} = \frac{1}{2} \text{時間}$$

ということであり、結局  $2 \text{ポンド} = 1 \text{ポンド}$  とすることである。4 = 1 なんていうすばらしい数学的計算であるるか！氏が、「二ポンドを一オンスとするのである」と述べているのは、あきらかに、「二オンスを一ポンドとする」ということを誤って、反対に理解したものでなければならぬ。「金二オンスを一ポンドとすることによって、辛うじて「一時間はつねに一ポンドという『価値表現』を得る」ことが可能となる。だが、右の「第二の方法」についての問題は、たんに以上にはとどまらない。より根本的な問題がそこに介在しているのである。

「金2オンスを1ポンドにすること、あるいは、その逆に「金1オンスを2ポンドとする」ことも、別にむづかしいことはない。たんに「一ポンドの表示する分量」を変えるだけのことである。だが、堀江氏の提起した「第二

の方法」の中には、はるかに困難な手続きがふくまれているのである。氏は「金の生産性の変動に正比例して」と簡単に云っているのであるが、いったい、どのようにして「金の生産性の変動」をとらえることができるであろうか？ 「変動」はおろか、「最初は1オンスの金が1時間で生産されていた」ということが、いかにして把握されうるか？ 金の生産に必要な労働時間は、絶対にとらええないのである。氏自身「価値（労働量）の大きさはそれ自体として直接に表現されるものでなく」と述べていたことは、いまだわれわれの記憶に新しいところである。氏は氏自身述べていたところの意味を御存じなかったものようである。「1オンスの金が1時間で生産されていた」とか、「2オンスの金が1時間で生産されるようになった」とかいうことは、直接氏自身の右の指摘に背反するものであり、事実、商品生産社会では、絶対にとらえられないのである。そもそも「1オンスの金が1時間で生産される」ことが判るような場合には、ポンドなどという価格形態などはまったく存立の余地がない。「量的不一致」などというような、もっともらしい「問題」は、はじめから起りようがないのである。この「第二の方法」なるものは、「現実を無視した方法」どころではなく、そもそも、存立不可能なものなのであり、商品生産そのものを止揚することなしには存しえないものである。

では、このような、本来存立不可能な「第二の方法」について、氏はどのように述べているか？ といえば、それは「実際には、そんなに器用に1ポンドの表示する量を時々刻々にかえることはできない」から、実行不可能である、と説明している。この説明は、正しいであろうか？ それは、まったく見当外れであり、二重の意味で誤りである。第一に、「第二の方法」が、実行不可能なのは、「1ポンドの表示する量を変えることができない」からではない。それは、実行不可能というよりも、はじめから成り立ちえない空想的方法でしかないのである。第二に、——こ

れが、肝腎のところであるが——「1ポンドの表示する金量を変えること」は、理論的にも実践的にも充分可能であり、しかも、歴史はこの実例にけっして事欠かないのである。いまさら貨幣史を播くまでもなく、「1ポンドの表示する金量の時々刻々に変え」て、人民の懐中からたんまりと法則的に捲き上げた支配階級は、古今東西を通じて数知れないほどあるのである。これらの支配者どもは、ほとんど「時々刻々」といってよいほどに、頻々と「同じ名前の貨幣單位にふくまれる金の分量を減らし」、改鑄悪鑄をかさね、しかも、その貨幣は、いかになく「貨幣として貨幣の役を果し」たのであり、また、それがりっぱに「貨幣の役を果す」ことを知っていたからこそ、かれら支配者は、かれら自身の利益にこれを「役立たせ」、その「役を果させた」のである。堀江氏はことさら、「時々刻々」という言葉を用いて「1ポンドの表示する金量をかえることはできない」としているが、文字どおり「時々刻々」かえることができないのは、子供にでもわかりきったことである。このような言葉を用いて「かえることはできない」ということを主張するとすれば、これはまた児戯に類するような論法である。ところが、文字どおりの「時々刻々」でなければ、かなり頻繁にかえることは可能であるし、また、事実かえられてきたものである。それゆえ、堀江氏の右の主張は、——「時々刻々」というような無意味な修飾語(さわり)をのぞけば——事實にも合致しない、まったく上の空のおしゃべりにすぎないということにならざるをえないのであり、あえて厳密にいうならば、事実と正反対の、事実を歪めてしまう妄論というべきなのである。

ところが、右のような、事実を歪めてしまう観念のおしゃべりについて、なおかつ、マルクスが一証人として氏に より引合いに出されているのである。氏は「マルクス自身が次のように書いているではないか」というように、あたかも万人にとって事理明白であり必ず首肯されねばならぬものであるかのごとくに述べているが、しかし、マルクス

の言葉どおりに「マルクスをもふくめて、すべてを疑え」というスローガンを堅持してやまぬわが堀江氏の方針からすれば、このこと自体、まことに奇妙なことといわざるをえないであろう。事実、マルクスの叙述は、「金の生産性の変動に正比例して、1ポンドの表示する金量を時々刻々かえることはできない」とか「それができたとしたら貨幣が貨幣の役を果さなくなる」とかいったようなことは、まったく関係のないことを説明しているのである。マルクスは「価格の度量基準」について説明し、「価格の度量基準」において問題なのは、「金の諸分量を金のある分量によって度量することであり、したがって、この「金のある分量」が「度量単位」として「固定される」必要があることを述べている。このようなことは、すべての度量基準についてつねに行われているところの、当然かつ自明の事柄であり、マルクスも、「同名の諸々の大いさについての他のすべての度量規定のばあいと同じように」と説明している。たとえば、長さを量る場合に、その度量単位としての1メートルの長さが固定されないでいるならば、長さについての度量は一般妥当性をもちえないし、総じて長さの度量は不可能となる。単位が確立され、固定することはすべての度量にとって必要であり、決定的なことである。だが、このことは、一度確定した度量単位が永久不変なものでないならばならないとか、それが一度でも変更されれば、変更以前の単位も変更以後の単位も通用しなくなる、総じて度量基準が存立しなくなる、とかいったようなことを意味するものではない。価格の度量単位が未来永劫にわたって永久不変であることは事実ありえないし、しかも変化しただけで、価格の度量基準がまったく意味をなさなくなるとかいうことはない。およそ価格の存するかぎり、一定の時期、一定の地域にわたって価格の度量単位が確立され、固定されていないとはならない、というだけである。同じ処でも時間を異にしたがって、価格の度量単位が別のものに変えることはありうるし、しかも変ったからといって、価格の度量単位としては認められないとか、総じてその価



との関係は同一不変にとどまらないのが原則である。」——(上の文章の意味) 命  $1 \times 2 = 2$   $1 \times 2 = 2$  が固定していれば金の生産性が変わるごとに  $1 \times 2 = 2$   $1 \times 2 = 2$  から  $1 \times 2 = 2$   $1 \times 2 = 2$  というように、「労働量(価値?)」と価格(価値?)との関係が変わらざるをえない。——これは、A・スミスさえすでに感知していたところの、いわゆる「価値と使用価値との矛盾」という事実を、理論的にではなく、現象的に、きわめて幼稚な形で、貨幣称呼にのみ結びつけ、たんなる名称の問題として見ていることを示している。

(氏の文章)「諸商品の生産性も金の生産性も等しくあがり……抽象の段階では、同一価格は生産性の向上度に反比例してより少ない労働時間を表現するようになる。あるいは、より少ない労働時間でつくられるようになる同一商品は相変わらず同一価格で表現される。」——(上の文章の意味)  $2 \times 2 = 2$   $2 \times 2 = 2$  から  $1 \times 2 = 2$   $1 \times 2 = 2$  になる、あるいは  $20 \times 2 = 2$   $20 \times 2 = 2$  から  $20 \times 2 = 2$   $20 \times 2 = 2$  になる。——右の主張を、通常の理論的用語をもって正しく表現すれば、つぎのようになるであろう。「諸商品の生産性と金の生産性とが等しくあがる」場合には、諸商品の金による価値表現すなわち諸商品の金価格には変りがない。同一種類の一定量の商品は、それ自身の価値(「労働時間」)がより少なくなつたにもかかわらず、従来と同じ金価格で表現される。価格の度量単位およびその貨幣称呼が同一不変であるならば、「同一商品」の「価格」すなわち貨幣称呼に変りがないのは当然である。(氏の文章)「社会的総生産物についていえば、物価水準は不変であり、生産性の向上度に正比例して、その総価格はふえていく、総価値(総労働量)  $\parallel$  総価格ではなく、同一の総労働量(総価値?)が、生産性の発展に正比例して、より大きい総価格(総価値?)で表現されるのである」(傍点—堀江氏、ゴシック体—山本)。——(上の文章の意味)(表式の(3)表式の(1)の場合には、「 $2 \times 14 \times 2 = 2$  (14時間)」であったのが、(3)では、「 $2 \times 28 \times 2 = 2$  (14時間)」となる。





量的關係のみをみるとして「価値」と「価格」とのあいだの「 $\equiv$ 」ではなくして、(1)の「価値」と(3)の「価値」とのあいだの、および(1)の「価格」と(3)の「価格」とのあいだの「 $\equiv$ 」の關係をみるといふのであれば、つぎのようになる。(1)の価値「 $4\equiv 3$ 」は、「生産性」のより低い労働の「 $3\equiv 2$ 」、(3)のそれは「生産性」のより高い労働の「 $4\equiv 3$ 」であり、これらは、たんなる「 $4\equiv 4$ 」の關係にあるものではない。同じことは(1)の「価格」 $4\equiv 2$ と(3)の「価格」 $2\equiv 2$ についても云われなければならない。このように両者のそれぞれについて質的差異を考慮に入れ、これを等質のものに還元した上で比較しなければならぬ。すなわち、(1)の「価格」は、「生産性」のより低い労働のもとでの「 $4\equiv 2$ 」であり、(3)の「価格」は「生産性」のより高い労働のもとでの「 $2\equiv 2$ 」であり、両者はいづれも、価値量として、同じ「 $2\equiv 2$ 」の労働の対象化したものにすぎない。(労働の「生産性」の差異は、価値総量を変化させえない)。したがって、どちらも「同一」であり、つねに「 $\equiv$ 」の關係が成立し、「より大きい」とか「より小さい」などという關係はまったく存しえない。在るのは、たんなる数字のちがいだけである。

さて、以上長々と検討を加えてきたところによって、すでに当面の問題にかんする堀江氏の主張の内容がいかなる性質のものであるかは、もはや疑う余地のないまでに明らかにされえたと思われるが、なお、念のため、氏の主張の全内容を成す基本的な特質を摘記すれば、つぎのようにいいあらわすことができる。

(1) 「価値」および「価格」という、基本的な範疇についての奔放自在な理解。このことは、?マークつきの新造語——「価値?」(価格)、「価格(価値?)」——に端的に示されている。価値は価格に「移行」し、価格は価値に「移行」し、同一物に帰一する。

(2) 貨幣称呼こそが眞の価格、現実的な価格であるとする主張。「ポンド」至上主義。

(3) 「1時間何ポンド」という「電力料金」式見地の堅持。

(4) 氏の「価格理論」への数学的計算の完全な奉仕。かくして、通常の数学的計算の枠を超えた無軌道な「計算」の駆使。

要するに、氏の主著の「第二十四章」の第一節「I 労働価値説の出発点における混乱」の全体を通じ首尾一貫その主柱となっているのは、むしろほかならぬ氏自身の超マルクスの『価値価格論』であり、氏のマルクス価値論批判の出発点における混乱そのものである。ところが、「価値と価格」にかんする以上のごとき主張をもととして、氏はマルクス主義批判家、J・ストレイチーの所説をそのままとりいれて「労働価値説を使うかぎり、社会的総生産物の増大を測定することができない」と断定し、「マルクスの労働価値説にしがみついている」ことの愚をさとし、「マルクスの労働価値説をすてたJ・ストレイチーを見習うこと」の賢明を説くにいたっているのである。(論文「現代資本主義と労働価値説——J・ストレイチーの問題提起によせて」——雑誌『経済評論』、一九五八年十一月号所載)。すでに氏の主著についてこれまで簡単な検討をおこなってきたわれわれは、J・ストレイチーのきわもの、著書の出現をまたなくとも、とつくのむかしから、わが堀江氏が、かの愚を悟り、この賢明を実行していることを、したがってJ・ストレイチーの著書はたんに氏の確信をいよいよ固くすることにのみ役立ちえたものであることを容易に推察することができるとは、ここでは、当面の問題にかんするかぎりでは、つぎの一点だけを指摘しておくことにしよう。それは、労働価値説を捨てたJ・ストレイチーが『現代の測定方法』である統計的な不変価値を使うことを主張しているのと全く軌を同じくしてわが堀江氏も、「労働価値説をつかうかぎり社会的総生産物の増大を測定することができない」が故に統計上の不変価格をつかえと主張していることである。ところで、今日、統計上の不変価格を現実に用い、これ

を十分に活用している国といえば、一〇〇パーセントマルクス経済学に則して社会主義的計画經濟を推進しつつあるソヴェト同盟であり、資本主義諸国でこれを活用しているものは一つもないのである。J・ストレイチーやわが堀江氏が「社会的總生産物増大の測定方法」としての唯一の方法たる「不変価格」という言葉を編み出すよりずっとむかしから、ソヴェトでは不変価格という言葉をつくただけでなく、その現実的意義を正しく把握し、かくして、これを實際に十二分に活用してきたのである。まさに氣の利いたお化けなら、とっくに姿を消してしまふときである、間拔けな野心家どもがこのこ出てきて一手専売を唱えたからといって、相手にする者があるか<sup>(4)</sup>。氏の右の新作論文には、なお「同一労働時間の生産物はつねに同一価格で表示されるか？」などという、まことに興味あるテーマ<sup>(5)</sup>が見出され、主著第二十四章第一節の内容とほぼ同じことがさらに積極的に展開されているのであるが、右論文は「労働の生産性」にかんする氏の主張を中心として述べられて見られるので、本稿の次節——三「労働の生産性」の問題——の中で、あらためて、必要なぎりぎり論及することにしよう。さきに、第二十四章第一節の中から引いて掲載した最後の箇条——⑩——についても「労働の生産性」および「社会的總生産物の増大の測定の方法」の問題と関連して、次節でふれることにしたい。ただ、ここであらかじめ参考までに指摘しておくならば、氏の「価値と価格」にかんする劃期的な独自の解釈は「労働の生産性」にかんする同じく劃期的、独自の解釈をかたく結びついており、前者はむしろ後者によってより多く、制約され、前者は後者の地盤の上にはじめてつくり上げられているような性質のものなのである。

(4) わが堀江氏は、一から十までJ・ストレイチーの後塵を拝しているわけではない。J・ストレイチーとちがう点もなければならぬ。J・ストレイチーは「マルクス経済学を捨てる」が、「マルクス経済学の創造的發展」を担うべきわが堀江氏は

「マルクス経済学を捨ててケインズ経済学に移る必要はない」と云う点で「根本的差異」を示している。ただし、氏からみればこれまでのマルクス経済学ではもちろん落第である。「創造的發展」家のつぎの指摘をよく味わわねばならぬ。

「マルクス経済学者も、實際上、実質国民総生産額、工業生産指数、貿易数量指数などを使うときには、統計上の不変価格のごやつかいになっている。ソヴェトでも不変価格で国民経済計画について計算をしている。手もとにある道具はつかえば良いのだ。問題は、その道具を収容しきれないマルクス経済学の基礎理論の未熟さにある。このギャップを埋めないと、この道具を使つての経済的分析と経済理論とが、どうしてもシツクリ合わないところが出てくるのだ。また、ストレイチーのような批判に十分答えることができないのだ」(論文、前出一一四ページ)。この訓示的主張の意味する理論的内容はつぎのごときものである。すなわち、わが堀江氏は、資本主義諸間における「実質国民生産総額、工業生産指数、貿易数量指数など」をソヴェトの「不変価格」と同じものと考え、資本主義諸国での諸指数の意義とソヴェトでの不変価格の意義とを同じものと考えているのである。これはまことにお見当ちがいの粗雑な議論である。ソヴェトの不変価格は全く異なった本質をもっており、マルクスの労働価値説の上のみ成り立ちうるもの、また、マルクス経済理論の実際の適用による計画経済推進における唯一の「方法」としてのみ活用されるもの、活用されてきたものである。ブルジョア経済家にとっては諸指数で充分である。社会主義経済建設にとつては、マルクス価値論による不変価格でなければならぬ。諸指数は「手もとの道具」であるが、ソヴェトの不変価格はマルクス経済理論が新たに作り出した経済建設の「武器」である。したがって、問題はソヴェト不変価格をその反マルクスの理論の中に収容しきれない、『わが創造的發展』家の修正的手腕の未熟さにある。このギャップのあるかぎり、修正的理論と現実経済とが、どうしてもシツクリ合わないところがでてくるし、『發展』家の歪曲の本質をおのづからあらわにせざるをえないのである。

(5) 氏の主著の第二十四章の大言壮語的テーマ——「同一労働時間はつねに同一価値量を生むか?」——とこの論文の中のテーマと比較されたい。両者の所論の内容はほとんどまったく同じものである。つまり、氏にあっては「同一価値を生むか?」であつても「同一価格で表示されるか?」であつても、事態に変わりがない。どちらも、すっかり同じものである。流行でマルクスをかじりかけたような者が「オヤ」と首をかしげそうな題目、商業主義ジャーナリズムがインテリ読者を釣る「学問的」だしものに向きそうな題目——こういう題目をいちはやく、大胆に——「創造的」に——かかげるのが、今日名と実を成すコツなのである。

(一九五九・四・二八)